メッセージアウトライン
創世記14:1～24「ロトの救出」

[1]「さて、シンアルの王アムラフェル、エラサルの王アルヨク、エラムの王ケドルラオメル、ゴイムの王ティデアルの時代のことである」
ここには東方の四人の王の名があげられている。
「シンアル」…シヌアル、シュメールとも言う。バビロンを中心とするメソポタミア地域。王アムラフェル。「エラサル」…正確な位置不明。おそらく北メソポタミアの一都市。王アルヨク。「エラム」…ペルシャ湾の北、ティグリス川より東の今のイランの地域。王ケドルラオメル。「ゴイム」…国の名前ではなく諸国民、異邦人を意味する。王ティデアル。彼らはアブラムと同時代の人物である。
[2-4]「これらの王たちは、ソドムの王ベラ、ゴモラの王ビルシャ、アデマの王シンアブ、ツェボイムの王シェムエベル、ベラすなわちツォアルの王と戦った。この五人の王たちは、シディムの谷、すなわち塩の海に結集した。彼らは十二年間ケドルラオメルに仕えていたが、十三年目に背いたのである」
ソドム、ゴモラ、アデマ、ツェボイム、ベラすなわちツォアル…これらの五つの地域はみな死海の南部に位置していた。それぞれの王はベラ、ビルシャ、シンアブ、シェムエベルで五番目のベラ(ツォアル）の王の名は記されていない。彼らは十二年間エラムの王ケドルラオメルに仕えていた。穀物や家畜、金銀などを貢物として納めていたのであろう。しかし、彼らは十三年目にそむき、東方の四人の王と戦った。「塩の海」とは死海のことであり、「シディムの谷」とはまだ死海の水に覆われていないそれ以前の地名であろう。
[5-9]「そして十四年目に、ケドルラオメルと彼に味方する王たちがやって来て……」
　東の四人の王の遠征軍はヨルダン川東岸を南北に走る古代の通商路（王の道とも言われる）を南下し、その道中で各地の民を打ち破りシディムの谷まで来た。「アシュタルテ・カルナイム」ガリラヤ湖東方約30キロの地。「ハム」ヨルダン川東方約20キロの地。「シャベ・キルヤタイム」死海の東約10キロの地。「セイルの山地」死海南方からアカバ湾にかけて広がる山地。「荒野の近くのエル・パラン」セイル山地の南、アカバ湾に面する地。モーセの時代にはエツヨン・ゲベルとして知られた。→民数記33:35「エン・ミシュパテすなわちカデシュ」エル・パランの北西の地。「ハツェツォン・タマル」死海西岸の地。後にエン・ゲディと呼ばれる。これらの地の住民は記されている順にレファイム人、ズジム人、エミム人、フリ人、アマレク人、アモリ人ですべてパレスチナの地の先住民である。アモリ人はハムの子カナンの子孫と思われる。→10:16　東方の王の遠征軍はアカバ湾に面するエル･パランまで南下し、そこから北西のカデシュに向かい、さらに北東に転じ、死海西岸のハツェツォンタマルまで行き、シディムの谷すなわち死海南部でその地の五人の王たちの連合軍と戦った。

[10-12]「シディムの谷には瀝青の穴が多くあり、ソドムの王とゴモラの王は逃げたとき、その穴に落ちた。そして、残りの王たちは、山の方に逃げた。四人の王たちは、ソドムとゴモラのすべての財産とすべての食料を奪って行った。また彼らは、アブラムの甥のロトとその財産も奪って行った。ロトはソドムに住んでいた」

五人の王たちの連合軍は打ち破られて逃走した。ソドムの王とゴモラの王は瀝青の穴に落ちたと書かれているが、実際はその中に自ら逃避したのであろう。遠征軍はすべての財産と食料を奪って行ったがアブラムの甥のロトとその財産も奪って行った。ロトはアブラムと別れてヨルダンの低地を選んだが、いつのまにかソドムの住民となっていたのである。

[13-16]「一人の逃亡者が、ヘブル人アブラムのところに来て、そのことを告げた。アブラムはアモリ人マムレの樫の木のところに住んでいた。マムレはエシュコルとアネルの兄弟で、彼らはアブラムと盟約を結んでいた。アブラムは、自分の親類の者が捕虜になったことを聞き、彼の家で生まれて訓練された者三百十八人を引き連れて、ダンまで追跡した。夜、アブラムとそのしもべたちは分かれて彼らを攻め、彼らを打ち破り、ダマスコの北にあるホバまで追跡した。そして、アブラムはすべての財産を取り戻し、親類のロトとその財産、それに女たちやほかの人々も取り戻した」

東方の王の遠征軍の攻撃から逃れた一人の男がアブラムのところに来て、敗戦の様子を語った。この頃アブラムはヘブロンのマムレの大きな樫の木のところに住んでいた。マムレはヘブロンに住んでいた先住民のアモリ人である。さらに彼にはエシュコルとアネルという兄弟がおり、アブラムはヘブロンに住むにあたって彼らと盟約を結んでいた。アブラムは親類のロトが捕虜になったことを聞き、直ちに行動を起こした。彼の家で生まれ、よく訓練されたしもべ三百十八人を引き連れてダンまで追跡し、夜襲をかけて東方の王の遠征軍を打ち破り、敵が略奪したすべての財産を取り戻し、またロトとその財産、捕虜となった者たちを取り戻した。さらに彼らはダマスコの北のホバにまで追跡した。アブラムと盟約を結んでいたマムレ、エシュコル、アネルのしもべたちも加勢したことは24節からわかる。東方の王の遠征軍は帰路はヨルダン川西岸沿いに北上したが、アブラムたちはその後を追い、打ち破り、すべての財産を取り戻すことができたのである。マムレたちの加勢があったとはいえ、彼らは敵と比べて少数であった。それゆえアブラムたちの勝利には、主なる神の守りと導き、助けがあったことは間違いない。「ダン」は後の時代にイスラエルのダン部族が住んだ町ではなく、もっと北東のダマスコに近い場所であったと思われる。「ホバ」は場所不明であるが、ダマスコでもヘブロンから直線でも約240キロある所である。これを徒歩で行くなら一日40キロ歩いても六日かかる。しかし、アブラムは甥のロトの救出のためにあらゆる犠牲と危険をいとわずに直ちに行動に移った。彼は自分のために最善をなしてくださる主なる神を信じ、主により頼みつつ追跡し、主もそれに豊かに答えてくださったのである。

[17-18] アブラムの一行が敵を打ち破って帰って来たとき、ソドムの王は王の谷と言われ

るシャベの谷まで迎えに来た。これはエルサレムの近くであったと思われる。またそこでアブラムはサレムの王メルキゼデクの出迎えも受けた。サレムは後のエルサレムのことである。メルキゼデクとは義の王という意味。
彼はいと高き神の祭司であったと言われている。彼はアブラムを祝福するためパンとぶどう酒を持って来た。これはアブラムが戦いに勝った感謝のために神にささげられたものを持って来たのであろう。そして、それらは彼らが帰る途中の食料にもなる。
[19-20] 19節でメルキゼデクは「アブラムに祝福あれ。いと高き神、天と地を造られた方より。」と祝福し、20節では「いと高き神に誉れあれ。あなたの敵をあなたの手に渡された方に。」と神をほめたたえている。これらのことからメルキゼデクの信じる神はアブラムの信じる神と同じ神であることがわかる。アブラムはこのメルキゼデクからの祝福を受け、自分の持っていたすべてのものの十分の一を彼に与えた。これはメルキゼデクが神の祭司であったがゆえになしたことであり、祭司としての彼はアブラムの上に立つ者であった。新約において彼は真の大祭司であるイエス・キリストの型として言及されている。
→ヘブル5~7章
[21-23] ソドムの王もアブラムへの感謝を表し、「人々は私に返し、財産はあなたが取ってください。」と言った。しかし、アブラムは主なる神に誓って、これを断固として拒否する。これは神の前に非常に罪深いソドムの町の、その王に「アブラムを富ませたのは、この私だ」と言わせないようにするためであった。
[24] アブラムは自分の判断の結果を他の人々にまで強制しようとはしない。ロトの解放のためにいのちをかけて行ったアブラムのしもべたちが食べた物、また彼と盟約を結んでいるアネルとエシュコルとマムレの一族には当然のこととしてそれ相応の取り分を取らせるように告げた。
　アブラムはいのちがけでロトを救い出した。これは罪と死と滅びの虜となっている私たち人間を、そのひとり子イエス・キリストをこの世に送り、十字架につけるまでして犠牲を払って救い出してくださった神の働きのモデルとも言えるものである。アブラムは自らのいのちを捨てなかったが、イエス・キリストは私たちの救いのためにいのちを捨ててくださった。私たちの罪のために身代わりとなられたのである。→ヨハネ3:16　そして私たちもアブラムのように自分の親族、関係者の救いのために祈り、労し、福音を伝える者となろう。この世のものは過ぎ去るが、神の与えて下さるものは永遠のいのちである。